指月

修禅寺・寺報
Shigetsu

発行所：福地山　修禅寺　〒410-2416　伊豆市修善寺964　電話〈0558〉72-0053　FAX〈0558〉72-9680

平成27年
第57号
1月1日

◇特集
修禅寺山門落慶法要
仁王様をお迎えし、修復された山門の通り初め

奥之院護摩堂がいよいよ建立されるはこびとなりました。

奥之院護摩堂／完成イメージ図

奥の院が始まります

平成十七年に先代住職が発願されて以来長らく準備してまいりました奥之院護摩堂建設事業が、いよいよ今年、着工されることになりました。

後期は約半年を予定しており、秋には完成の予定であります。今年の星祭りは新しくなった護摩堂で修行されることを目指しております。

山門落慶法要

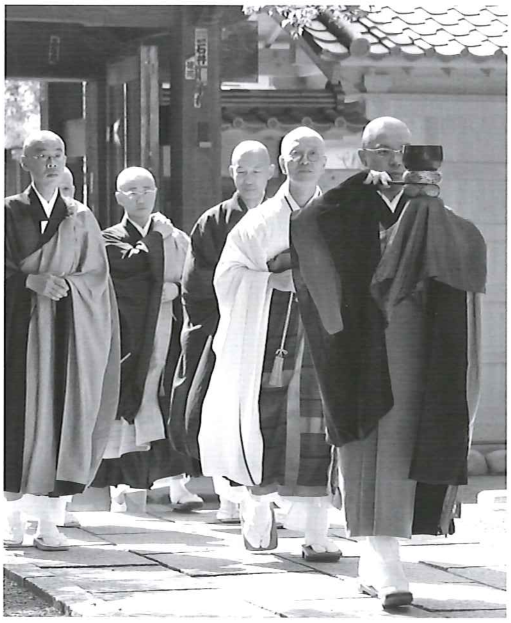
平成26年9月23日(日)

仁王様をお迎えし、修復された山門の通り初め

一昨年（平成二十五年）九月の着工以来約一年、昨年二月には二度の大雪に見舞われましたが幸い大きな支障もなく工事が進み、六月十日に上棟式を厳修。その後、修復工事完了にあわせて九月十二日にはそれまで長く指月殿に安置されておりました仁王さま二体を山門脇に御遷座（御移動）しました。

この御遷座を受け、満を持して、九月二十三日に落慶法要（竣工式）と相成りました。

当日は好天に恵まれ、山門建築委員会はじめ工事関係者そして大勢の檀信徒の皆様が参列されました。山門前にて落慶法要が厳修された後、吉野御前様の先導のもと、参列者全員が綺麗になった山門を'くぐり初め'しました。



御前様 くぐり初め

大勢の参加者も続いて

山門前にて法要

鑑賞

修禅寺 宝物（ほうもつ）紹介

◉青面金剛明王石像（しょうめんこんごうみょうおうせきぞう）

今回の修禅寺寺宝紹介は石像『青面金剛明王』をご紹介します。

修禅寺の青面金剛明王さまは六手（腕が六本）の青面金剛石像としては日本最古の像となります。

青面金剛明王は庚申信仰の御本尊とされています。体は青（緑）色で、二本、四本または六本の腕があり、弓矢宝剣を握り、頭髪はさか立ち、体に蛇をまとい、足に鬼を踏んでいます。

庚申信仰とは、道教の教えに、人間の体内には三戸という三種類の悪い虫が棲み、人の睡眠中にその人の悪事をすべて天帝に報告に行くというものがあり、そのため、三戸が活動するとされる庚申の日（六十日に一度）の夜は、眠ってはならないとされ、庚申の日の夜は人々が集まって、徹夜で過ごすという「庚申待（まち）」の風習・信仰があり、この御本尊が青面金剛明王であったのです。

修禅寺の石像は六手の形としては全国で最初に出現した貴重な民間信仰の遺産であります。

寺の古地図（江戸時代初期）に修禅寺東脇に庚申堂が見えるので、その入口あたりに立てられていたものが後に移動されたものと考えられます。

像容は下部が台状に幅広く加工され、その部分に二猿が彫られ、頭部は冠状のものを被り、合掌六手型であります。第二、第三手は右上より、宝珠、玉を手のひらに乗せており、左側は上から宝輪、剣を持ち第一手は合掌形です。

なお下部の猿右側が塞目と考えられますが破損で判別困難であります。また背面を平らに加工し、そこに銘文を刻むのも異例であります。

（青面金剛像の初発は今のところ、福井県松岡町の正保四年（1647）石祠の室壁に彫られた四手青面金剛であり、修禅寺の承応三年塔は四手像を含めると全国で四目にあたるが、六青面金剛像としては国内初見になる。）

【修禅寺宝物殿にて公開中です】

※参考／
青面金剛明王像（第一手宝剣形（だいいっしゅほうけんがた））

謹告

去る平成二十六年十月九日未明に修禅寺第四十二世住職、田中徳潤老師が御遷化されました。
田中御前さまは開創千二百年という寺史の大きな節目を前に着任し、広く社会に門戸を開き人々の心の拠り所として時代が求める修禅寺のあるべき姿を目指し、檀信徒会館建立、本堂大修理等の境内伽藍の整備、参篭坐禅法話等の布教活動や檀信徒参加の法要行事を数多く行い、地元地域との連携を深め、平成十九年には開創千二百年の記念大祭が無事円成し、続く時代に向けて確かな道筋を刻まれました。

世寿九十八歳
平成三年より平成二十一年まで
修禅寺住職

本葬儀は十月十五日、伊豆の国市田京・藏春院住職山田元晶大老師を拝請し、多くの関係寺院、檀信徒の皆様に御協力をいただき、当山本堂において厳修されました。
御参列、御協力賜りました方々には心より感謝いたしますとともに、謹んで誌面をもって御報告申し上げます。

修禅寺寺務所

東堂様を偲んで

修禅寺護持会副会長
野田　治久

田中徳潤ご老師は、十七年の長きに渡り修禅寺住職をお勤めいただきましたが、惜しまれつつ平成二十一年に退董されました。その後も東堂様として修禅寺の諸行事にお出向きくださり、いつもにこやかな笑顔で私共にお声をかけてくださいました。近頃はあまりお姿をお見かけしなくなりご心配申し上げておりましたが、残念ながら東堂様ご遷化の報を受けることとなりました。私は吉野ご住職、田口護持会長とともにお悔やみに伺い、お懐かしい、穏やかなご尊顔を拝しながらこれまでの感謝の想いをこめてご冥福をお祈りいたしました。そして奥様より、東堂様は自ら作法通りに胸の上で手を組み、眠るようにお静かに旅立たれたと伺いました。東堂様は僧侶としてまた人としてご自身の終焉を自然に受け入れていらしたのだと、私は大きな感銘を覚えました。

ところで在職中の田中ご住職のご功績といえば檀信徒会館慈照閣新築と本堂大修復を発願し施行された修禅寺開創千二百年記念大事業が思い起こされます。その他伽藍の修理修繕や、仏像などの寺宝修復も手がけられた多くのご功績は寺歴に残るものでありましょう。

また一方で田中ご住職は、お寺を中心として修善寺温泉が賑やかに発展していくことを願い、時として修禅寺の境内や本堂、書院を私共に快く開放してくださいました。田中ご住職のお力添えなくしては、二千年の伊豆新世紀創造祭を皮切りとした頼家八百年祭、修善寺温泉開湯千二百年祭などのイベントの大成功はありませんでした。また、桂座公演や修善寺調理師会による修禅寺御膳、旅館女将のもちより雛展など修禅寺ならではの文化の香り濃い事業は、多くのお客様や檀家の皆さんの支持を得て、今日までお楽しみいただいております。そのなかでも、盆踊り大会を復活させ自らマイクをお持ちになるほど音楽好きな田中ご住職は、桂座公演を楽しみにしておられました。いつも控えめにいちばん後ろの席で、時には大黒様とご一緒にニコニコと仲睦まじく公演に聴き入っておられたお姿を忘れることができません。

奇しくも昨年の桂座は、東堂様がご遷化された翌日より三日間の公演

でございました。十五周年を迎えた桂座公演は、修禅寺本堂ならではの厳かな雰囲気の中、大盛況のうちに終了することができました。私は本堂に響く音楽を聴きながら、東堂様も何処かでこの公演を見守り、私共と一緒に楽しんでくださっているような気がいたしました。

田中ご住職はいつも修禅寺の繁栄と修善寺温泉の発展、そして檀家の皆さんの幸せを切に願っておられました。そんな東堂様のご意志は今、吉野ご住職に引き継がれております。修禅寺は温かで賑やかなお寺であるだけではなく、厳かな雰囲気のなか凛として少し背筋が伸びるような、禅寺らしい佇まいが加わってきたなと感じています。昨年、山門修復と仁王堂も完成し、裏山治山も環境保全林として事業が進んでいます。さらに田中ご住職の悲願であった奥の院護摩堂建設も決定いたしました。今後修禅寺は檀信徒や街の人々の信心のなか、ますますの発展を遂げることでしょう。

東堂様、これからも修禅寺と修善寺温泉と私共檀家をお見守りください。

長い間本当にありがとうございました。

合掌

田中徳潤老師の思い出

修禅寺火曜坐禅会
落合　早苗

私が田中徳潤老師に初めてお会いしたのは、私が所属する「ふるさとガイド」の会の講師として、修禅寺の歴史を教えて頂いた時です。老師のお話はわかり易く、静かな語り口の中にも、情熱と愛情が感じられ、引き込まれました。おかげさまで、ガイド活動のなかで修禅寺は今でも私が一番聞いて頂きたい案内場所です。

次にお会いしたのは、老師が始められた火曜坐禅会に参加した時でした。坐禅会での老師は、誰に対しても平等で優しく接して下さったので、皆、一度でファンになってしまいました。

坐禅堂で老師と坐禅会の皆様と坐ると、ピンと張りつめた空気の中、緊張とリラックスという相反するものが不思議と程良いバランスで感じられ、心地よく坐っていく自分に気づきました。ある時、老師に「坐禅堂で坐ると、家で一人で坐るより呼吸も楽で気持ち良く坐禅できます。」と申しましたら、老師は「坐禅堂では皆の気が満ちているから。」と答えて下さいました。皆で老師のもと心を、息を合わせる事の大切さを学びました。法話の時間では、経典や傘松道詠をご講義頂きました。その後、仏教の説話、時事問題、道徳問題など話題は多岐にわたり、お話される時の広い視野と弱者にも目を向ける優しさ、そして瑞々しい感性をお持ちの方だと思い、尊敬の念を強めました。

私にとって火曜日は、とても大切な日となり、それは現在も続いています。

十五年前にお姑さんとの関係で悩んでいる友人がいました。ある日の坐禅会の折「お姑さんと気持ちが通じず悩んでいる友人がいるのですが、どうアドバイスしたらよいのでしょうか？」と言ってしまいました。老師に、こんな世俗の事をお聞きしてもいいものか迷っていましたが、思わず出てしまった言葉でした。老師は「七十才、八十才になった人に変われと言っても無理があるので、三十代のお嫁さんが慈悲の心を持って接するのがいいでしょう。」とアドバイスして下さいました。そのお言葉は友人のみならず、私の人生の指針にもなっています。

老師が修禅寺を退董（御隠居）された時、寂しくて悲しくて涙が止まりませんでした。しかし、別れの辛さよりも、人生の師に出会えた事を有り難く幸せに思うべきだと気付きました。その後御隠居先を訪問した折、たびたびマッサージをさせて頂きました。施術後いつも「ありがとう、楽になりました。」と仰り、静かに合掌して下さいます。奥様がお茶を淹れて下さると奥様にも「ありがとう。」と仰います。帰宅後、家族にその話をしますと「まさに生き佛様だね。」と主人と息子が言っていました。老師が、いつでも誰に対しても感謝の気持ちを伝える姿に、私自身あらためて教えを頂きました。

初めて老師とお会いしてもうすぐ二十年。思い出は尽きませんがその一つ一つが私の宝物です。たくさんの事を教えて頂きましたが、その教えをこれからの人生に少しでも生かす事が御恩に報いる事と思っております。

田中徳潤老師ほんとうにありがとうございました。

合掌

2月〜8月のお寺の行事・イベントです

◉2月3日／13時
追難会大祈祷（節分祭・豆まき）

◉2月14日〜3月8日
女将のもちより雛展

◉2月15日／11時
釈尊涅槃会（お釈迦様の御命日）

◉3月17日／15時
頼家公春彼岸墓前供養

◉3月21日／10時
お彼岸法要

◉**4月5日／10時**
釈尊降誕会（花祭り法要）
《花まつり記念講演》
吉備文化財修復所所長　牧野隆夫 先生
『山門仁王像について』

◉4月20・21日
春季弘法忌大祭（春のお弘法さん）

◉4月25・26日
手作り市

◉7月5日／11時
弁天祭

◉7月20日／午前中
頼家まつり・十三士供養祭

◉7月31日
新盆棚経（初めてお盆を迎える精霊さまへのお経）

修禅寺山内衆紹介

修禅寺におります僧侶・スタッフの紹介コーナー。

渡辺勝志 さん

吉野御前様のお手伝いとして平成21年に神奈川県より修禅寺に上山しました。御前様とともに六年、朝の坐禅にはじまり、境内清掃、売店補助、御朱印等々…まさに修禅寺の縁の下の力として活躍されております。

みなさま宜しくお願いいたします。

思うこと

修禅寺仏教婦人会会長　児島　敏子

お寺＝葬儀・法事の時お世話になるところ。辱い話ですが、若い頃ずっとそんな風に思っていました。嫁いで四十年余り、当時は貧しく生活に追われ、又神道から改教していたせいもあり、姑から伝って来なかったのです。

十年前、佛教婦人会の地区役員が順番でまわってきたので二年間やらせてもらいました。以来、観音講と掃除に参加する様になりましたが、それ以外は申し訳ない程疎遠でした。

観音講に参加して、お経の意味や内容はわからないけれど何だか清々しい。汗を流した七月の掃除が終わると心地良い風が体を伝っていく。寒い十二月の掃除の後は心が暖かくなる…、年を重ねそんな気持ちが芽生え、足を運ぶようになりました。

そのお陰でしょうか？望んだところで叶うはずもない、私にはとても重い役を与りました、修禅寺のボランティアです。たぶん大変なことでしょう。『一年めの四月を乗り越えたら終わったようなもの』と言われ、十月を迎えた今、ふり返った時、本当にそう思いました。私をサポートして下さる柳川副会長さんと松根会計さん、地区の役員さん、地域のみなさんの協力により、四分の一終わりました。残り四分の三はみなさんと交流を深めながら、楽しく行事を進めていきたいと思いますので、是非お力をお借し下さいますようお願いいたします。

上記にも紹介されておりますが、豆まき、花祭り、春・夏のお弘法さん、お盆と年末の大掃除…などなど、修禅寺のさまざまな行事において、その屋台骨としてご奉仕くださるのが修禅寺仏教婦人会のみなさまであります。

御寄附

○八十八箇所巡拝草鞋マスコット
—南町　鈴木容子 様—
○八十八箇所巡拝草鞋マスコット
—牧之郷　山口惣一郎 様—
○竹ほうき 十本
—中里　三須裕之 様—
—柏久保　杉村英明 様—
○白　米　三〇キロ
—中里　唐澤之泰 様—
○白　米　三〇キロ
—北又　山口信彦 様—

〜御懇志ありがとうございました〜

○歳末たすけあい・東日本大震災救援托鉢御報告

○十二月二十五日に毎年恒例の歳末たすけあい托鉢（たくはつ）が行われました。昨年同様、今年も皆さまから温かい浄財をご喜捨いただきました。

皆さまからご喜捨戴きました浄財は、伊豆市社会福祉協議会に寄付させて戴きました。

あたたかいお志し誠にありがとうございました。

合掌

《東日本大震災義援金報告》

◆平成二十三年三月〜
平成二十六年十二月八日現在

合計　一六九万七二〇三円

○義援金は日本赤十字社はじめ各復旧復興支援団体に寄付させて戴きました。義援金箱はお守り売店前にあります。

今後とも息の長いご支援の程よろしくお願いいします。

年回表

平成二十七年度

年回	寂年号
一周忌	平成二十六年
三回忌	平成二十五年
七回忌	平成二十一年
十三回忌	平成十五年
十七回忌	平成十一年
二十三回忌	平成五年
二十五回忌	平成三年
二十七回忌	昭和六十四年
〃	平成元年
三十三回忌	昭和五十八年
三十七回忌	昭和五十四年
四十三回忌	昭和四十八年
四十七回忌	昭和四十四年
五十回忌	昭和四十一年

◎法事のお申し込みは、できましたら、一〜二ヵ月前にはお願いいたします

○編集後記 よもやま

YOMOYAMA

佛遺教経という経典のなかに「世は皆無常なり、会うものは必ず離ることあり」とある。

人間は永遠に生きることが出来ない。生きていれば誰にでも必ず「別れ」が来る。アタマではわかっているつもりだったが、それがこんなにも辛く、悲しいことであると、四十三になってはじめて知った。

先代御前様田中德潤老師は私が平成七年に修禅寺に上山して以来、ずっとお側に仕えさせて戴いた老師だった。ちょうど、学校でいう先生と生徒のような関係である。

悲しく寂しく、こんなにも心にぽっかり穴が開いてしまうとは。

しかし、葬儀のあと御前様の遺影を見てハッとした。お檀家さまも皆このような辛い思いのなかで葬儀をされておられるのだ。だからこそ、これからも全身全霊で御供養に臨まねばならない、と。

高僧の死去を「遷化」という。教化の場を現世からあの世へ遷すという意味。死してなお愚僧にご教示下さる…まさに御前さまは遷化されたのだと思った。

◆指月編集担当
はくりゅう　記

徳雲の閑古錐

住職　吉野真常

徳雲閑古錐　幾下妙峰頂　他傭
痴聖人　擔雪共塡井

徳雲(トクウン)の閑古錐(カンコスイ)　幾(イク)たびか下(クダ)る妙(ミョウ)峰頂(ブチョウ)　他の痴聖人(チセイニン)を傭(ヤト)って　雪(ユキ)を擔(ニナ)って共(トモ)に井(イ)を塡(ウズ)む

徳雲とは、華厳経入法界品に記される徳雲和尚（比丘）のこと。善財童子が偏参した五十三人の善知識の一人です。妙峰頂とは徳雲和尚が住んでいた妙峰山の頂きのこと。

閑古錐とは、閑はしずか。古錐は古く、すり切れ、先が円くなったきり。世事俗情にひきまわされない悠悠たる真の道者。真の佛者のことです。

この禅語（徳雲閑古錐　幾下妙峰頂　他傭痴聖人　擔雪共塡井）に親しむ時、昨年十月九日に遷化された、当山四十二世大全徳潤老師の事が思いだされます。

今から三十数年前、小生の得度式（僧侶となる式）の時、師寮寺伊豆市堀切の泉龍寺で初めて御会い致しました。失礼とは思いますが、その時の小生の老師に対する印象は、口をへの字に曲げられ、黒縁の眼鏡をかけた、細くむづかしい顔。まさにするどい錐のような人だな～と言うものでした。

昭和六十年二月、師匠（丹羽圓宗老漢）が修禅寺四十一世住職として入山するに伴い、小生も師匠補佐の為修禅寺へ上山致しました。

それからです。徳潤老師と親しく御会いし御話し等できるようになったのは。そして平成三年師匠にかわって修禅寺四十二世住職になられました。

徳潤老師が修禅寺へ入られてから、老師の御顔が少しづつかわって行くのを感じておりました。まるく、やさしくなって行くのです。特に平成十九年修禅寺開創千二百年祭の前ごろより、もうもうやさしい、慈眼の人。佛さまのような御顔になっていきました。まさに徳雲の閑古錐のごとく。いろいろな事があったのでしょうね。楽しい事より苦しい事の方が多かったかもしれません。これは、小生が修禅寺の住職になって分かることなのですが。何回も何回も嶮しい、山に登り下って来たのですね。そのつど角が取れ、まるくなっていったのだと思います。

雪で井戸をうめる事はできません。なぜなら雪は、溶けて水になってしまうのですから。井戸をうめる。うめない等は、大した問題ではありません。大切なことは、雪を擔うことです。雪を擔うとは生きる事。精一杯、誠を尽くして生きる事です。

徳潤老師の訃報を聞きかけつけた時、老師の御遺体は、こう小生に言っておりました。

「ワシは、ワシの一生を精一杯、生き切ったぞ！！」と

「本当に、御苦労さまでした。」

と小生は、答えておりました。